

## IV 研究のまとめ

### 1 要約

本研究の目的は、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業の効果を検証し、併せてユニバーサルデザインの視点を効果的に授業に取り入れるための知見を得ることであった。そこで、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業を定義し、要点を整理した。それに基づいて検証授業を実施し、効果の測定を行った。

その結果、以下の4点の知見が得られた。

第1に、授業における「情報の提示」についてユニバーサルデザイン化することで「わかりやすく」することが重要であること。

第2に、学校種や発達段階によってユニバーサルデザイン化の重点が異なり、小学校では理解に向けて「情報の提示」を、高等学校では理解に向けては「主体的な学び」を、興味関心に向けては「情報の提示」をそれぞれユニバーサルデザイン化することが重要であること。

第3に、授業を真にユニバーサルデザイン化するためには、一つの手法を取り入れるだけではなく、「多様な手立て」があること。

第4に、特別支援学校においては、単にユニバーサルデザインの手法、例えば本研究で整理した「授業づくりの12のポイント」を授業に取り入れるだけではなく、「個人差への配慮」の徹底を図ることが何より重要であること。

これらの知見を学校で生かし、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業が円滑に実施できるように実践事例集を作成した。

### 2 今後の課題

今後の課題として3点挙げる。

第1に、研究の方法論についてである。本研究は、10校の事例的データをもとに検討を行ったため、得られた知見だけから安易に一般化することはできない。小学校と高等学校におけるユニバーサルデザイン化の違いや特色について言及したが、教科ごとの特色など他の影響について検討を行う必要がある。また、高等学校といっても学科や課程などにより様々な特色があり全て同じには扱えない。より多くのデータを更に検証する必要がある。

第2に、ユニバーサルデザインの対象についてである。「授業づくりの12のポイント」を示したが、それらはCAST「学びのユニバーサルデザイン・ガイドライン ver.2.0」での「提示」に関する内容に重心が置かれていると思われた。検証授業を通して、通常の学級で「よい指導」といわれる取組の中には、特別支援教育の立場から見て、「まさにユニバーサルデザイン」といえるようなたくさん取組に出会った。

今後は、「参加の促進」「主体的な取組」などにおいてユニバーサルデザインの視点を取り入れた実践例の検証及び実践紹介をしていくことが求められる。

第3に特別支援学校の実践を十分に検討できなかった。適切に検証するためには、児童生徒個々の実態を適切に把握した上で、効果の測定をしなければならない。

これはユニバーサルデザインの授業に限らず、障害による学習上又は生活上の困難のある児童生徒の授業評価について言えることであり、今後の重要な課題である。